

奈良県御所市
南郷遺跡（向坂地区）

平成26年(2014年)3月
御所市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、御所市道拡幅工事に伴う事前調査として、御所市副市長（担当　御所市土木課）の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市大字南郷 1000-1、1001-1、1009 に所在する南郷遺跡（向坂地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査の体制等は次の通りである。

調査主体：御所市教育委員会
調査担当：御所市教育委員会 文化財課 文化財係長 木許 守
調査期間：平成 25 年 11 月 26 日～12 月 2 日
調査面積： 50 m²
- 3 現地での写真撮影、ならびに遺物の撮影は木許が行った。
- 4 本書の執筆・編集は木許が行った。
- 5 本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。

目次

例言

1. 位置と既往の調査	1
2. 調査の契機と経過	3
3. 調査の成果	4
4.まとめ	8

参考文献

図版

挿図　目次

図1 御所市の位置	1
図2 周辺の遺跡分布図	2
図3 調査地周辺の地形	5
図4 調査区 平・断面図	6
図5 検出遺構 平・断面図	7
図6 出土遺物	8

図版　目次

図版 1. 調査区全景（南東から）
2. 調査区全景（北西から）
3. 噴渠検出状況
4. 土坑検出状況
5. 調査区南東端の土層堆積状況
6. 調査区北西端の土層堆積状況
7. 出土遺物 (S 与 1/3)

1. 位置と既往の調査

(1) 位置

御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km² の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛山、葛城山がそびえ、南東部は竈門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がのびる、内帶と外帶の接する地域といえ、自然景観のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛山と葛城山の鞍部となる水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

南郷遺跡は、市域の南西部に当たる金剛山東麓部に位置しており、その東には風の森峠から北に下る谷筋を流れる葛城川を臨んでいる。さらにその対岸にあたる丘陵には総数 700 基に達すると推定される国指定史跡巨勢山古墳群が造営されており、まさに巨勢山古墳群とは葛城川を挟んで対峙する立地である。

遺跡の立地地点の地形をもう少し詳しく見ると、山麓部の、標高の低い所は葛城川の川岸辺りを東限とし、高い所では金剛山への傾斜が急峻にして立ち上がる傾斜変換点辺りを西限として、遺跡の範囲とされている。標高は 130 m から 300 m 程までとなっている。また、金剛山の東麓部は、ここに源を発して東流する百々川、竹田川、三宅川などの浸食によって生じた比較的深い谷が幾つも刻まれている。遺跡の南北方向での限りはこのような谷によって区画されるが、微視的には、そのような谷に挟まれた尾根上にも、幾筋もの小さな谷地形が見られる。後述するように、広大な南郷遺跡の範囲内には、古墳時代の様々な性格をもった遺構が一定の単位ごとにまとまりをなして存在するが、このいわば小単位となる遺跡は、そのような大小の谷地形によって区画されている。

(2) 既往の調査

南郷遺跡における発掘調査は、平成 3 年度から本格化した。それまでは、当遺跡は「佐田遺跡」などと呼ばれ、現在の葛上中学校の周囲を中心とする東西南北 500 m 程の範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地と認識されていた。この頃までの発掘調査は、個人住宅建築に伴う事前調査が多く、その規模も小さいものであった。それらの調査では、土器片等の遺物は出土するものの、明確な遺構が



図 1 御所市の位置



図2 周辺の遺跡分布図 (S. = 1/50,000)

検出されず、遺跡の性格等について考える材料も少なかった。

そうしたなかで当該地を含む広大な範囲で県営圃場整備事業（葛城地区）が、平成2年頃までに計画され、平成4年から本格的に着手されることになった。御所市教育委員会は、奈良県教育

委員会文化財保存課などと協議して、事業当初の試掘調査として佐田地区（木許編 1993）のほか下茶屋地区などの試掘調査を担当したが、その後、平成 16 年度までの 10 年以上にわたる試掘調査・本掘調査は奈良県立橿原考古学研究所が実施した（坂編 1996 ほか）。

当該圃場整備事業にともなって、延べ 59,000 m²もの面積が発掘調査された。そしてこの発掘調査によって、当遺跡に、地域首長の「高殿」や「神殿」・祭祀場・居住地など、金・銀・銅・鉄・ガラスなどを材料にした手工業生産の工房、大形倉庫群など古墳時代の様々な遺構・遺物が存在することがわかった（坂・青柳 2011）。これらの調査成果はいずれも注目するべきもので、当地のみならず我が国の古墳時代史を考えるうえで極めて重要な資料を提供することになったのである。

また、これらとは別に、当市教育委員会は、遺跡の範囲内において、主として個人住宅建築に伴う発掘調査を継続して行っている（木許編 2008 ほか）。これらの調査は、浄化槽の埋設予定地の範囲などを発掘調査するもので基本的に小規模なものであるから、明確な遺構の検出には至りにくい。しかしそれでも遺物包含層の存在を確認することなどができる。

例えば平成 8 年度には、図 3 に示したように、今次調査地の至近の位置で発掘調査を行っている（木許 2008）。この時の調査では 3 箇所のトレンチを設けて下層の状況を確認した。旧宅地整地層の下層には暗褐色砂礫などの堆積があり、さらにその下層に灰色粗砂層があった。また粗砂層からは僅かながら須恵器片が出土した。当該調査地の東方下位では、先の圃場整備事業に伴って南郷大東遺跡が調査されている（青柳編 2003）。南郷大東遺跡は木樋や貼石を使用した導水施設が検出され、水辺の祭祀が行われたと考えられている（坂・青柳 2011）。平成 8 年度の調査で検出した粗砂層は、この水路の上流域の埋没土であった可能性が考えられる。

2. 調査の契機と経過

平成 25 年 10 月 8 日、御所市 東川裕市長から、御所市南郷 1000-1、1001-1、1009 について、市道拡幅整備工事を目的とする発掘通知（94 条第 1 項）が提出された。

当該地は南郷遺跡（『奈良県遺跡地図』16-D-2）の範囲内にあたる（図 2）。

今回工事計画は、工事延長 L = 90.8 m、幅員 W = 5.0 m で、路肩擁壁工および水路工を実施するものである。このうち、南半部にあたる 25.467 m 分については、現状の水田等に切り土を行つて擁壁を設置するとされた。この際、切り土の深さが 1.5 ~ 1.8 m に及ぶ箇所がある。一方、北半部の側溝部分については路面から深さ 20cm 程度の掘削にとどまるものとなっている。

当市教育委員会は、上記のような工事の計画内容から、南半部の切り土部分について発掘調査が必要との意見書を付して、提出された発掘通知を奈良県教育委員会に進達した。対して、奈良県教育委員会から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」があり、これを受けた当市教育委員会は「発掘調査の通知」を提出した。

その一方で、発掘調査の時期、費用等について、事業課である御所市土木課と協議を重ね、事業

費に関する受託契約の締結等の事務的な手続きを進めた。最終的に、調査員の配置を含めた日程等の調整を終え、現地調査を平成 25 年 11 月 26 日に着手し、12 月 2 日に終了した。実働日数は 5 日であった。

3. 調査の成果

(1) 基本層序

図 3・図 4 に示したように、調査区は工事計画に合わせて、幅 1.5 ~ 2.8 m、長さ約 21 m を設定した。

上述したとおり、南郷遺跡の立地する地点の全体の地形は西が高く東に低い緩斜面地になっている。また、周辺は西から東方向に幾筋もの尾根地形が張り出しており、人家等は尾根上の比較的高い位置に造られている。今次調査地付近は、このような地形にあって水田耕作地を確保するために、西側を切り土して東側を盛り、または尾根部を切り土して谷部に盛るといった造成を行っている。このことは、現状の地形からも容易に見て取れるが、実際に発掘調査によって以下のようない土層の堆積を確認した。

調査区の上層図は図 4 下図として示した。

1 層（現耕作土）を除去すると、2 ~ 5 層として水田造成に伴うと考えられる盛土が見られた。このうち特に調査区の北半部にある 3 層（暗黄灰色砂礫）は厚さ 20cm ほどの比較的薄い盛土で、これを除去すると、調査区の北端から約 3m 程の地点から 11m 程までの地点の約 7 ~ 8m の区間では、その直下に地山が検出できた。地山は赤褐色を呈する花崗岩バイラン土である。この部分は微地形の尾根に当たっており、この地山の南北は、それぞれ南方向、北方向に傾斜する斜面になっていた。その斜面上には、地形のより上位から流入してきた砂礫や砂質土（6 層・7 層・8 層・9 層）が堆積していた。

この地山斜面上の流入堆積土からは、古墳時代の須恵器片のほか瓦器片、陶器片などが出土した。雑多な遺物が含まれていたが、最も新しい遺物は中世のものである。

(2) 遺構

遺構は、北半部で土坑を、南半部で水田造成に伴うとみられる暗渠排水溝を検出した。

土坑の平面形は、長径 60cm、短径 45cm の梢円形で、深さは 30cm であった。地山上面で検出したが、地山面での遺構はこれ以外には認められなかった。ただし、この部分での地山は微地形の尾根に当たり、ここは上記のように削平されていると考えられるので、本来、この付近にはより多くの遺構が存在した可能性がある。また検出した土坑自体もその上位は削られているとみられる。土坑からの出土遺物はなかった。

暗渠排水溝は調査区の南半部で検出した。遺構の形成面は、図 4 下図の土層断面図に示したように、自然堆積土となる 6 層の上面である。そして、この溝を形成した後に、検出地点では約 40cm

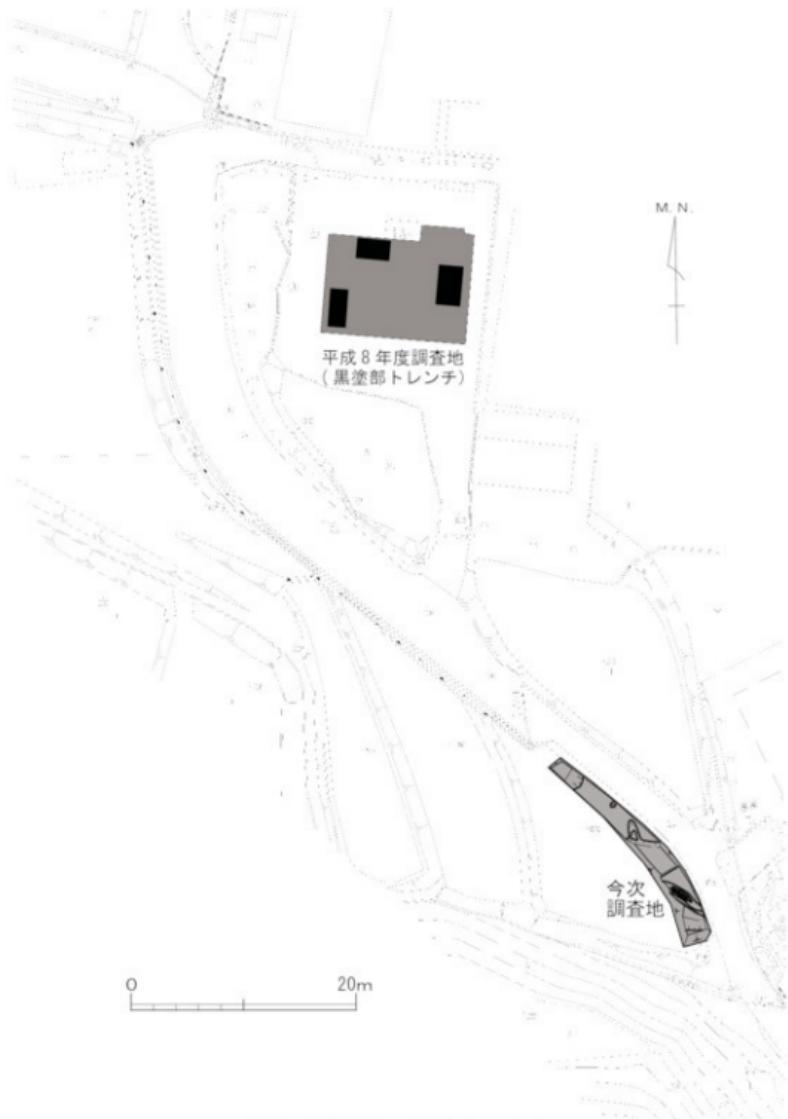


図3 調査地周辺の地形 (S. =1/500)

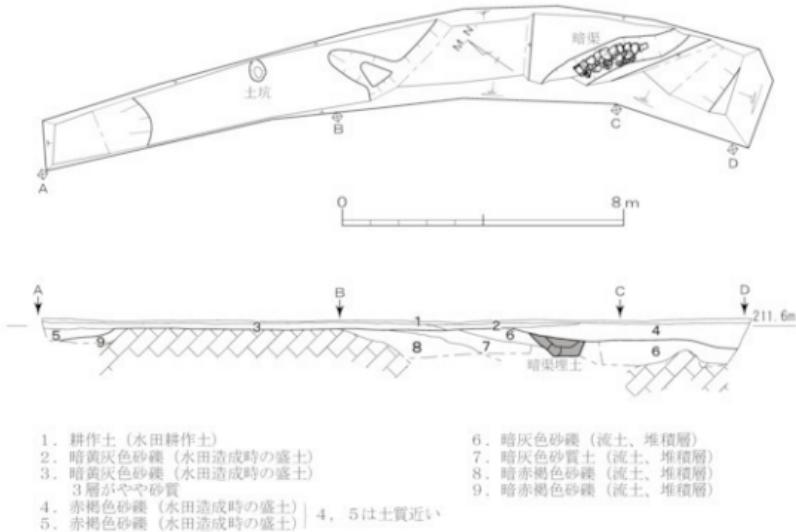


図4 調査区 平・断面図 (S.=1/160)

の盛土をして水田面が造られている。このような層位的な関係から、この溝の目的は主として盛土に含まれる水分を排出することであったとみられる。

暗渠遺構は、西から東方向に幅 85cm、深さ約 50cm 程の溝を掘った後、ここに長径 30cm 程度の花崗岩礫を不規則に入れて土を埋め戻したものである。ただし、検出した東端から 1 m 程はこのような石材が認められなかった。上述のように、遺構の直上には水田造成のための盛土が存在したから、単に遺構が攪乱されていたとは考えにくい。ここに石材が存在しなかったことは理解しにくいが、この地点が東に向かって傾斜が急になる傾斜変換点付近に当たるとみられることから、この部分はこの溝の東端付近に当たっている可能性がある。このような場所であるため、造成もやや丁寧さを欠き、一旦溝を掘って埋め戻しておくことで、盛土中の水分を抜く程度の機能は果たしたのかもしれない。溝の検出長は約 3.5 m である。

遺物は、溝の埋戻土に混じって、古墳時代の須恵器片（6-2）のほか 14 世紀後半頃の小形の土師器皿（6-1）が出土した。古墳時代の須恵器は細片化して断面などの摩滅も進んでいたが、土師器皿は比較的完形に近いものであった。このような遺物の状態から、遺構の形成時期は、14 世紀後半ないし 15 世紀前葉頃であると考えられる。

(3) 遺物

今次調査によって出土した遺物は、須恵器 14 片、土師器 11 片、瓦器 2 片、陶器 1 片があった。

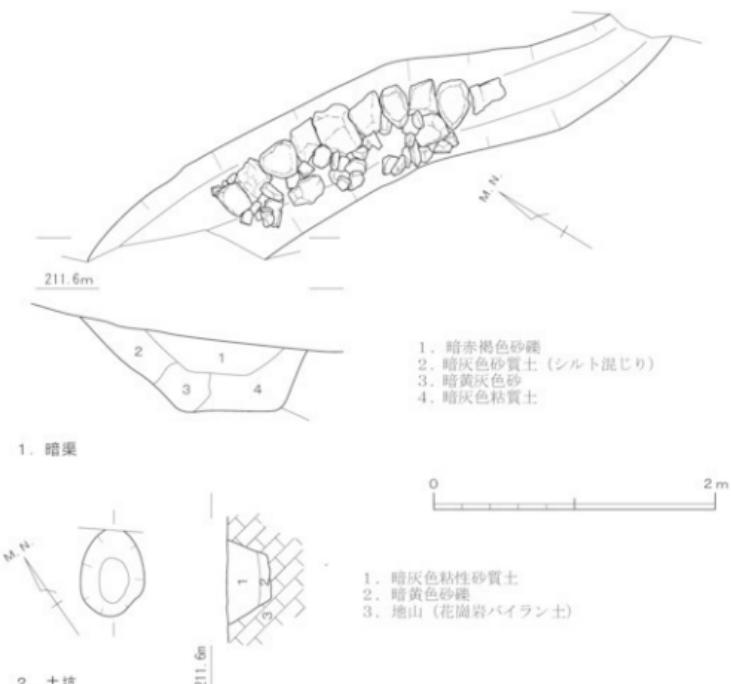


図5 検出遺構 平・断面図 (S.=1/40)

このうち国化可能であった5点を図6に掲げた。出土地点は、(6-1)・(6-2)は暗渠排水溝の埋土、(6-3)は図4-6層、(6-4)・(6-5)は図4-8層の流土堆積層から出土した。

(6-1)は、小形土師皿である。口径8.2cm、高さ1.0cmで、ほぼ完形で出土した。口縁部に強いヨコナデが施され、口縁部が外傾して立ち上がり、口縁部と底部の境界に稜が形成されている。

(6-2)は、須恵器杯身の口縁部である。口縁部の約1/6が残存した。最大径は13.5cm程になるとみられ、短く内傾した立ち上がりが取り付いている。

(6-3)は、須恵器高杯脚部である。裾部の復原径は14.5cmで、裾部に向けて大きく開いている。裾端部は外上方に傾斜する面をなし、端面は強いヨコナデによって中央がやや縮んでいる。また脚柱状部との境界付近に現状では1条の凹線が認められる。

(6-4)は、須恵器高杯柱状部である。外面に横方向のカキメが残っている。

(6-5)は、須恵器器台脚台の端部付近であろう。横方向の凹線文によって文様帶が区画され

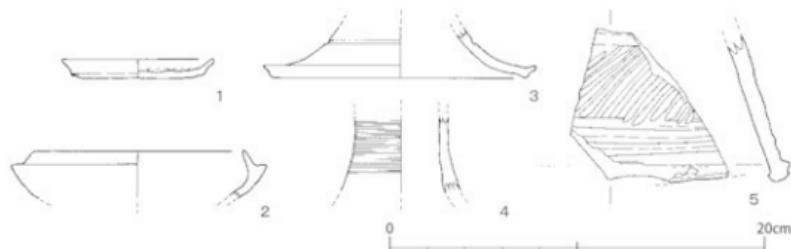


図6 出土遺物 (S. = 1/3)

ているらしく、残存部にはヘラ状工具による連続した斜線文が見られる。

これらの土器は、(6-1)が14世紀後半ないし15世紀前葉頃のものとみられ、これは出土した暗渠の形成年代を示すと考えられる。その他の須恵器はおおむね古墳時代後期のもので、古墳時代以来継続する南郷遺跡の年代を示していよう。

3.まとめ

南郷遺跡は古墳時代中期の集落遺跡・生産遺跡として著名である。今回の工事はその南郷遺跡の範囲内で計画されたことから、事前の発掘調査を実施した。工事による現状地盤に対する影響範囲を調査対象としたものであるから、調査区は狭小なものであったが、遺構・遺物を検出した。

遺構は土坑1基と暗渠溝1条を検出した。

土坑は、検出面の地山自体が削平されているとみられるので、本来はより多くの遺構が存在した可能性があるし、遺構の深さも本来はより深いものであったと考えられる。埋土に遺物を含まなかつたために形成時期は不詳である。ただし、周辺からの出土遺物をみれば、古墳時代に形成された遺構のうち、深さの深いものが残存したという可能性も考えられる。

暗渠は、水田造成のための盛土直下にあたる自然堆積土層上面で検出した。溝の中に石材を入れた後に埋め戻す構造のものであった。埋土中から14世紀後半頃の土師器小皿などが出土した。遺構の形成時期がこの頃であれば、周辺の水田開発が室町時代に行われたことになる。このことは、当地における農業発展史や、ひいては現状の景観が形成されていく過程を知る一つの手がかりになる。小規模な調査であるため、地域の全体像を復原するまでには至らないが、今後調査資料が蓄積されれば、さらに考察を深化させることが可能になろう。

参考文献

- 青柳泰介 編 2003 「南郷遺跡群」Ⅲ (『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第74集)
- 木許守 編 2008 「南郷向蛇遺跡」「平成5～19年度 市内遺跡発掘調査」(『御所市文化財調査報告書』第34集)
- 木許守 編 1993 「佐田遺跡範囲確認調査報告」(『御所市文化財調査報告書』第16集)
- 木許守 編 2008 「平成5～19年度 市内遺跡発掘調査」(『御所市文化財調査報告書』第34集)
- 坂靖 編 1996 「南郷遺跡群」I (『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69集)
- 坂靖・青柳泰介 2011 「葛城の王都・南郷遺跡群」



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（北西から）



3. 暗渠検出状況



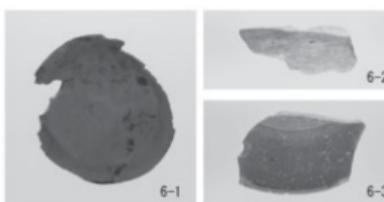
4. 土坑検出状況



5. 調査区南東端の土層堆積状況



6. 調査区北西端の土層堆積状況



7. 出土遺物 (S. 1/3)

報告書抄録

ふりがな	なんごういせき (むかしまさかちく)							
書名	南郷遺跡（向坂地区）							
副書名								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	木許 守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2277 奈良県御所市室102番地 TEL 0745-60-1608							
発行年月日	2014年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
なんごういせき 南郷遺跡	こやし 御所市 大字南郷	29208		34° 25' 27"	135° 42' 50"	2013.11.26 ～ 2013.12.02	50	市道拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南郷遺跡	集落	古墳・中世	暗渠排水溝・土坑	須恵器・土師器				

